

銭湯巡礼

銭湯は地域の人々を結び、今も昔も日曜にさまざまな幸福感を与えてくれる場所。時代と共に次々と姿を消していく中、頑張っている銭湯を訪ねる。



第15回 「福の湯」(昭和46年)
札幌市北区新琴似7条6丁目6-11
☎011-761-5097 14時30分〜22時
月曜休 Pあり 番台式 440円



番台は小西さんと奥様、それと91歳になる小西さんの母が交替で務める。

今月の巡礼先は新琴似の住宅街にある「福の湯」。「いっしょにいって番台の上から迎えてくれたのは、2代目当主の小西廣幸さんだ。かつて石狩市で農業を営んでいた父が離農して古くからあった銭湯を買い取ったのが昭和46年だ。まだ未舗装の地域だった

銭湯は、地域の人を繋ぐ場でありたい。そのためにはもったいできる事があるはずだ。

が隣りには大きな市場があり、大変な賑わいだったという。「当時は周辺にアパートもほとんど増えず、急速に街が出来上がって行く途中にありました。銭湯利用者数は全国的には昭和42年をピークに下りに入るのですが、この辺はまだ風呂のある住宅が近隣に少なかったせいかとにかく芋の子を洗うような混みようでしたね」と回想する。

その日、繁盛したかごころかは、空の牛乳瓶の数でも推測できる。一番のピーク時には瓶が40本入る木製のケースが一日で10箱積

まれたこともあるという。途中で牛乳屋さんが商品の補充に駆けつけるほどだった。その時は1日で約10000人の利用があったというから驚きである。

創業当時は大きな主浴槽のみ。その後、昭和59年の改装で副浴槽の栗風呂、スチームサウナと水風呂、ランド湯も備えた現在の姿に生まれ変わった。それにしても、多くの銭湯が時代に合わせてフロント式に変える中で、なぜ番台式を残したのだろうか。

「風呂屋はお客様との対話が大事だと日頃言っていた親父が、番台を残すことを強く希望していました。それにフロント式にするとうとうしても脱衣所が狭くなってしまふという懸念もありましたので…」

番台に慣れないのか入浴を諦めて帰っていった女性も中にはいたが、広い脱衣所を残したおかげで、福の湯は今も何かと忙しい。脱衣所の男女の間仕切りは可動式になっており、壁側に寄せると約5畳の広々としたスペースが使えるようになる。小西さんの妻は週に2日、午前中に体操教室を開いており、約40人ほどの生徒が通っているという。また、月に2度は近隣の高齢者を15〜20名ほど迎え、看護師による問



昔懐かしい籐の籠と、現代の籠。さて味わい深いのはどちら。



髪がふわふわの綿あめみたいな仕上がりになるんです、ハイ。



「入浴後の体の温まり方が違う」と好評のランド風呂。



知人の農家から分けしてもらった規格外野菜を、どれでも100円で販売。常連さんたちにすこぶる人気で、早い時間に売り切れることも。



女性用脱衣所には高齢者の健康企画で参加者が作った切り絵が飾られていた。



男湯の脱衣所。間仕切りを取るとスポーツクラブのスタジオばりの広さがある。



当主の小西廣幸さんは、全国公衆浴場組合の副理事長や札幌公衆浴場組合の理事長も務めている。

診や血圧測定、ゲームや講話などを楽しんでもらう。さらにボランティアのメンバーによる手作りの食事を提供し、入浴を楽しめるという活動を、20年ほど前から続けているという。

街から銭湯が姿を消しつつある中で、小西さんは「銭湯は地域の人たちを繋ぐ場として、まだまだできることがある」と前向きだ。地域住民の寄合所となり、顔なじみの客同士でお喋りをするだけでもいい。一人暮らしの高齢者にとっては、なわのここと心の支えになるだろう。銭湯側からも、市の包括支援センターやデイサービスなどの情報を発

信していくこともできる。さらに今後は、若いお母さんたちの育児相談の場に活用してもらいたいこともできるのでは—と。

全国的に銭湯の廃業が急速に進む一方で、小西さんのように銭湯の新たな価値を創設しようとしている人もいる。我ら銭湯愛好家ができる事は、まずは月に1度でも地域の銭湯に足を運んで、陰ながら応援していくことだろう。